特別企画

その人の「やりたい」から、地域はつながる

―本人の想いを起点に、多職種から多業種連携へ。カラーズの実践を通じて考える―

東京都大田区で福祉用具レンタルや訪問介護など多様な在宅サービスを提供するカラーズ。介護業界内での多職種・他事業所連携にとどまらず、異分野・異業種ともタッグを組んで地域に必要なものを一緒に生み出している。全ての原点は「相手を知る」ことだ。

1. たった１つの段差が、家族の１日を変えた

「あっ、転んだ」。目の前で人が転ぶ場面を見たことはあるだろうか。楽しみにしていた外出先で転んでしまった。痛かった、怖かった、周囲の人に見られて恥ずかしかった。その人は、その後も同じように楽しめるだろうか。そして帰宅した後、「また行きたい」と思えるだろうか。

ある春、私は両親と桜のきれいな観光地のお寺へ出かけた。普段は離れて暮らしているからこそ、帰省した際には、他愛のない話をしたり、おいしいものを食べたりする時間を大切にしている。その日も「これから桜を見て、何を食べようか」と話しながら、売店のトイレへ向かった。用を足して母を待っていた、その時だった。母はトイレの入口の段差につまずき、私の目の前で転倒した。治療中の歯が取れ、口や鼻から出血していた。幸い大きなけがには至らなかったが、母はマスクをつけ、話すこともつらそうだった。桜の前で写真を撮っても表情はどこか暗く、楽しみにしていた食事も思うように食べられなかった。

母はどんな気持ちだったのだろう。父や家族は、どんな思いでその後の1日を過ごしたのだろう。私は母が自分を責めないよう、できるだけ笑顔で過ごした。しかし心の中では「あの段差さえなかったら」と何度も考えていた。たった1つの段差が、家族の楽しみにしていた1日を変えてしまった。

1度の転倒をきっかけに、「怖い」「不安」「迷惑をかけたくない」と外出を控え、身体はまだ出かけられるのに、「出かけたい」という気持ちそのものが小さくなってしまうことがあると考える。

私は、その「やりたい」が消えてしまうことが、残念でならない。

2. 私たちは、その人の「やりたい」を知っているだろうか

私は作業療法士として働き、現在は福祉用具専門相談員として、本人の望む生活を起点に環境を整える仕事をしている。身体機能や日常生活動作を評価し、できないことを把握するのは大切な仕事だ。しかし、私たちは、その人が我慢していること、諦めたこと、心の奥にしまっている「やりたい」を、どれほど知っているだろうか。

「もう旅行は無理だ」「家族に迷惑をかけたくない」「転ぶと怖いから出かけない」。そうした言葉の背景には、本当は出かけたいという気持ちが隠れているかもしれない。本人が希望を口にしないからといって、希望そのものがないとは限らない。できないことを確認するだけでなく、何を大切にしてきたのか、どんな暮らしを望んでいるのかを知ることが、支援の出発点になる。

家族の「もう一度一緒に旅行したい」「好きだったものを食べさせてあげた



執筆▶
代永裕樹
株式会社カラーズ
福祉用具事業部
福祉用具専門相談員 兼
作業療法士



共同執筆者▶
田尻久美子
株式会社カラーズ　代表取締役